

評論雜感集 下

歴史と文學

桶谷秀昭

桶谷秀昭

評論雜感集下

江苏工业学院图书馆
藏书章

歴史と文學

著者略歴

桶谷秀昭

おけたに・ひであき

昭和7年(1932)東京生まれ。昭和30年、一橋大学社会学部卒業。主な著書に『ドストエフスキイ』(平林たい子文学賞)、『保田與重郎』(芸術選奨文部大臣賞)、『昭和精神史』(毎日出版文化賞)、『伊藤整』(伊藤整文学賞)など(著作一覧参照)。

評論雑感集 下

歴史と文學

2002年12月10日 初版印刷

2002年12月20日 初版発行

著者

桶谷秀昭

装幀者

菊地信義

発行人

柳下和久

発行所

北冬舎

〒101-0062東京都千代田区神田駿河台1-5-6-408

電話・FAX 03-3292-0350

振替口座 00130-7-74750

発売

王国社

〒270-0002千葉県松戸市平賀152-8

電話 047-347-0952

FAX 047-347-0954

印刷・製本 株式会社シナノ

© OKETANI Hideaki 2002, Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-86073-008-9 C0095

歴史と文學評論雜感集 下
目次

一 文章

幸田露伴『運命』と『連環記』	11
鷗外史伝の文章	40
津田左右吉雑感	44
生命への帰郷の文学・岡本かの子	51
伊藤整『日本文壇史』の動機と方法について	67
唐木順三『現代史への試み』をめぐって	77
三島由紀夫『絹と明察』の合図	89
態度の人・村上一郎	93
近代精神に殉じた人・福田恆存	100
大岡昇平『花影』と『レイテ戦記』	107
田久保英夫論 追悼のために	111

一一 歴史

『阿部一族』森鷗外	133
『元禄忠臣蔵』眞山青果	136
『夢酔独言』勝小吉	139
『吉田松陰』河上徹太郎	143
『吉田松陰』徳富蘇峰	146
『桜田門外ノ変』吉村昭	150
『霧の中』田宮虎彦	153
『城下の人』石光眞清	156
『三十三年の夢』宮崎滔天	159
『ある保守主義者』ラフカディオ・ヘルン	163
『河原操子』保田與重郎	167
『福翁自傳』福澤諭吉	170

『天地有情』土井晚翠 …………… 173

『乃木』スタンレー・ウォツシユバーン …………… 177

『私の昭和史』末松太平 …………… 180

『シブミ』トレヴェニアン …………… 184

『太陽の帝国』J・G・バラード …………… 188

『大東亜戦争肯定論』林房雄 …………… 192

『天と海』浅野晃 …………… 196

『山の音』川端康成 …………… 199

三 回想

二十世紀の三冊 『心』『氷島』『現代畸人伝』 …………… 205

戦争文学五篇 …………… 210

未完の「日本人の最後の幸福」 …………… 213

敗戦文学と戦後文学	221
青春の読書「悪霊」と「心」	225
精神・靈性・自由 鈴木大拙	232
佐藤春夫『小説 永井荷風伝』について	238
批評的創作 わが小林秀雄	243
含羞の文学・中野重治	248
本多秋五『一閃の光』について	252
家庭の幸福は諸悪のもとではない 阿部昭	255
妥協知らぬ文学精神・藤枝静男	260
共感力に満ちた人・埴谷雄高	264
中島榮次郎といふ文学者	267
人間哀歎の風景を描いた作家・藤澤周平	270
松陰、西郷、子規、二葉亭のことなど 司馬遼太郎	274

奥野健男のこと …… 292

江藤淳の死 …… 298

もうひとつの敗戦文学・浅野晃 …… 306

あとがき …… 310

初出一覧 …… 311 著者著作一覧 …… 314

上巻、下巻とも題字は著者自筆

歴史と文學

評論雜感集 下

一
文章

幸田露伴『運命』と『連環記』

一

明治がをはり大正が始まつた年の九月、乃木希典の殉死事件があり、この事件は、新旧世代のあひだのみならず、おなじ世代においても、賛否両論をひきおこした。だが、おほむねのところ、旧世代の人びとはこれに共感を抱いた。

旧世代とは幕末から明治のはじめに生まれ、このとき不惑の齡にすでに達してゐた人たちをいふ。

幸田露伴はかぞへ年四十六歳であつた。「東京日日新聞」に求められて短い文章を寄せた。「乃木將軍」と題し、その冒頭は次のやうである。

「生あり。死あり。

生きて死せるあり。死して生けるあり。

生ぜしめられて生じ、死せしめられて死す。之を天地間の遊塵となす。

生きて而して未だ曾て生きず、生きて而して既に死す。之を酒肉間の行尸かうしとなす。

死して而して未だ曾て死せず、死して而して猶生く。之を神となし、鬼となす。」
それから、神と鬼を説明する、二つのセンテンスのあとに、

「乃木將軍は夫神なる乎。神乎、神乎、神也。」
と断定する。

生があり、死がある。舞ひあがつて生き、地に落ちて死ぬ、ちり、ほりがある。生きてはゐるが、飲食によつていのちを保つてゐるだけで、生きながら死んでゐるにひとしい人間、これを「酒肉間の行尸」といふ。死んでなほ生きる存在、これを神といひ鬼といふ。神は志を遂げて永遠に生きる存在であり、鬼は志において挫折しても、なほ志のほろびない存在である。乃木將軍は神といふべきか、しかり、神である。

現代口語文に直訳すれば、おほよそ、そんなことをいつてゐる文章である。しかし原文の韻律はすつかり失はれる。

漢文脈といふよりは、漢文よみ下しそのままの文語体で、最初の二行と、次の三、四行がそれぞれ対句構造になつてゐる。

中味よりは文章の造型意思によつて生きる文章である。

いま、文章といつたが、露伴にはせれば、私が仮りに直訳したやうな現代口語文は、文章、なんかではない、といふことにならう。

露伴は大正期においてなほ、東アジア文明圏に伝統的な文章意識を抱いてゐた。

たとへば、「今日普通に文学といふと、西洋諸国の影響で直に小説戯曲等を其の主要部分のや

うに看み做なし思おも做ひすのが常であるが、支那日本に於ては決して然様いふやうには行かぬ。支那に於ては小説は文学上最下級のものである、最劣等のものである（中略）文学として第一に取扱ふべきものは無論正格の詩と文章とである。」（『藝術的文献に現はれたる日支両国の国民性』大正五年）といふやうな考へ方である。

この、かつて明治二十年代には日本でも自明であつた文章観、文学観は、日露戦後において急速に影をひそめて行つた。

作者の実感あるいは告白の表現手段として、会話のみならず地の文をも現代口語文で書く自然主義小説家の擡頭が、伝統的な文章観の没落に手を藉した。

日本の一般生活において文章表現が文語文から口語文（今日では話し言葉として意識されてゐるが、まだ当時は文語体にたいして俗語体といふ呼称によつて意識された）になつたのは、日露戦争前後からで、その端的な現象が、手紙の文章である。候文でなければ相手にたいして礼を失するといふ習慣が失はれはじめた。

永井荷風のやうな偏癪な保守家は、口語文の手紙を憎悪し、よまずに破り棄てた。

ともかく、さういふ移り変る日本の文明的変質過程において、露伴の孤立は異様なくらゐである。

「乃木將軍」において文章のみならず、文明感覚に裏打ちされた発想法が孤立してゐる。その結びは、法華経寿量品を引いて、乃木の「神しん」たるゆゑんを説く。

「神や死せず、経に曰く、我諸もろの衆生の苦界に没在するを見る、故に身を現すを為さず、其

をして渴仰を生ぜしめ、其の心の恋慕するによりて乃ち出で、為に法を説くと。又曰く、常に悲感を懷き、心遂に醒悟すと。將軍自ら死して人皆將軍を懷ふ。將軍乃ち不説を以て道を説き、人皆不聞を以て教を聞く。実は滅度せずの言の虚しからざるを見る。

將軍に於て寿量品を読み、寿量品に於て將軍の死を観るべし。」

乃木殉死事件にたいする反応は、それを抱く人の文明感覚を期せずして表現することになった。かつて露伴と親交があり、露伴夫人の病死のあと、再婚の相手を紹介してことわられたのがきっかけで以後疎遠になつた鷗外の反応が、衝撃と呼ぶにふさはしいものであつたことは周知である。陸軍軍医総監として明治天皇御大葬の列に加はつてゐたとき、その事件を聞いて、はじめ事の真偽を疑ひ、事実であることを知つて、その夜、「興津彌五右衛門の遺書」を書き、以後、現代小説の筆を絶つた。元和偃武以後の武士を歴史小説として描き、露伴が「運命」を書くよりはやく、江戸十八、九世紀の儒者医官の史伝に没頭して行つた。

乃木殉死事件は鷗外にとつて歴史的瞬間といふべきものであり、明治文明開化以降の時間から反転して、江戸文明社会への回想をもたらしした。

漱石の回想は、明治文明開化がもたらした精神の悲劇相の自覚になり、「心」といふ一種の寓意小説を書いて、「明治の精神」といふ言葉を生んだ。

露伴は漱石とおなじ慶応三年生まれである。そして鷗外より若い。

しかし露伴には、鷗外や漱石にみられる歴史的回想の過程が、その内面においてたどることができない。いふまでもなく露伴に歴史感覚がないわけではない。それどころか、歴史は、露伴に